

## 大学改革に緩みはないか

下川正晴

毎日新聞編集局編集委員

筆者はソウル、バンコク特派員、論説委員、編集委員と主に外信畑を歩いてきた新聞記者である。大学教育の現状を専門的にフォローしてきたわけではない。拙文は「大学教育に関心を持つジャーナリストの視点」程度のものとして、読んでいただければ幸いである。

### 大学の評価とは何か

最近の新聞報道によると、3月末に「大学評価学会」という新しい学会が設立された。「4月から全国の大学に義務づけられる第三者評価の手法や基準に問題があるとして、学者ら約140人が国主導の大学評価システムに『待った』をかけることになった」（読売新聞2004年3月28日朝刊）のだという。

その記事を手掛かりにインターネットで検索してみると、同学会の設立宣言が見つかった。（<http://university.main.jp/blog/sengen20040328.html>）

「現在すすめられているさまざまな大学評価は、経済的視点が一面的に強調されています。今まさに始まろうとしている認証評価機関による『第三者評価』でもこの視点はいっそう強まっており、大学評価本来のありようについての議論は軽視されているのです。（中略）。今日の大学・短期大学においてさまざまな問題があることは事実であり、大学人の自浄能力が発揮されなければなりません。わたしたちは、『第三者評価』の法的義務づけを、大学・短期大学という高等教育機関のありようを考える契機として、真摯に受け止めたいと思います」

第三者の目から見れば、この文章はあまり感心できない。文部科学省側の“攻勢”に押されて学者たちが重い腰を動かし始めた、としか読めないからだ。1960年代の初め、筑波への研究学園都市建設をめぐる批判の論陣を張った大学人は少なくなかった。そういった過去の轍を踏むのではない

かと危惧させるのだ。

## 筑波大学改革への評価

筑波大学の開学から30年が経過した。日本の大学には再び「政府主導の大学改革」の波が押し寄せている。

日垣隆「検証・大学の冒険」(岩波書店、1994年)によれば、「アメリカ型の大学運営を強引に導入した筑波大学では、教育組織と研究組織とが完全に分離されたため、両者をつなぐ営為は、例えば信じがたいほど膨大な会議時間を大学人に強いた」という。

しかし、同書も指摘するように、一般社会が筑波大学に対して好感を寄せたのは、その「率直な自己評価」(日垣)によるところが少なくない。

1988年にまとめられた「筑波大学の自己評価と改革の指標」(筑波大学企画調査室)が、その好例である。そこでは、講座制を打破したはずの学系制による研究活動が、積極的なグループと消極的なグループに分解するという「二極化現象」が指摘されていた。いま、その状況はどのように改善されたのだろうか？

「筑波大学の将来像」をめぐる学内でさまざまな議論が行われているのは、この「筑波フォーラム」の誌面からも伺い知ることができる。

「筑波フォーラム」65号に掲載された前川

孝昭教授(農林工学系)による「わたしの提言・筑波大学のパラダイム転換」は、「大学移転に賛同」した研究者が、筑波30年間の経験を踏まえて、新たな提言を行ったものとして興味深かった。「フットワークの良い大学であること」「世論(社会)を見方につけること」「自己点検改善機能の構築」などと、提言は具体的だった。

## 筑波大学改革に緩み？

しかし、筑波大学の改革に一種の「緩み」現象が見られるのではないか。外部の目からみて、そんな懸念が生まれつつあるのも事実である。

大学評価・学位授与機構が昨年春、教養教育で「要改善」と指摘した28大学のうちに、筑波大学が含まれていたという。この事実は学外者にとって「筑波大学のイメージ」を裏切るのに十分である。前川教授が「衝撃を覚えた」と危機感を語るのも当然であろう。

試みに、昨年10月に出版された「AERA MOOK 大学改革がわかる。」(朝日新聞社刊)に目を通してみた。「筑波大学の大学改革はどう評価されているのだろうか」という関心からである。ところが、筑波大学に関する記述はわずか1カ所しかなかった。(見落としたりはないと思うが…)。「学生による授業評価」の項目で、それも単に過去の事

例として大学名が挙げられている程度である。一般社会の「筑波大学の改革」に関する視線は、かなり冷え込んでいるのではないのだろうか。

「大学ランキング2004年版」(朝日新聞社刊)によると、高校からの評価はAランクと高いものの、「進学して伸びた」との評価は、2002年版では「★★★★★」の評価だったのに、2004年版では「★★★★」に落ちているのも気になるところだ。

このような傾向は、他の項目でもうかがえる。

例えば、他大学の「学長からの評価」(総合)では、2002年版8位だったのが2004年版18位▽高校からの評価(総合)では2002年版5位が2004年版8位に落ちた。

一方、企業からの評価(総合)では2002年版と2004年版では評価方式が変更されているため単純比較できないが、2004年版掲載の「企業が選ぶ『役に立つ』大学」(週刊ダイヤモンド調査)では筑波大理系は20位、同文系は36位だった。同じく「企業が選ぶ『優れた』大学」(日経産業新聞調査)では、総合13位だった。「高校からの評価」よりも「企業の評価」が厳しい、という筑波大学の傾向は変わらず続いているようである。

「メディアへの発信度」も高いとは言えない。1998年～2002年の4年間(総合)で、

筑波大学は18位だった。千葉大学(15位)神奈川大学(17位)をも下回っている。都心から離れた場所にあるという「地の不利」が影響しているのだろうか。

## 他大学生の肉声

数値の引用ばかりが多くなった。ここでは、もう少し具体的な「大学生たちの肉声」をいくつか紹介しておきたい。

というのも、筆者は記者活動のかたわら、毎日新聞東京本社版夕刊(土曜日)に掲載されている学生ウィークリー「キャンパス」の編集長として、大学生スタッフの面倒を3年余り見てきたからである。「キャンパス」は大学生自身が企画、取材し、執筆するというユニークなページだ。現在のスタッフは首都圏約30大学の男女学生約70人。

その学生たちに「筑波大学のイメージ」を聞いたところ、次のような多様な答えが返ってきた。

「全国から学生が集まっている。研究設備も整っている」(早稲田大2年)

「予備校の時、筑波大学にだけは行かない方がよいと言われた。敷地から死体が出てきたりすると…」(成蹊大3年)

「国立大なのにスポーツに力をいれている。学生柔道団体戦は今年度、筑波大学が優勝した。サッカー選手も筑波大学OBが多い」(国学院大4年)。

「もともと東京教育大学なので、教員養成校の印象もある」(成蹊大3年)

「国際色の強い大学だ。イスラムやアフリカ系の留学生をよく見かけた」(東京学芸大3年)

「知り合いに筑波の大学院生が多い。もっと研究したいなら筑波へ。隔離されているので、研究にはもってこい？」(明治大4年)

これらの回答は一般社会の「筑波を見る目」と大差ないだろう。

### 閉鎖的な大学

「キャンパル」編集部の学生が、筑波大学に取材に出かけたこともある。しかし、その時の印象は「閉鎖的な大学」というものであった。その学生の筑波大学への批判はかなり手厳しい。

「閉鎖的だと感じた理由はいくつもある。まず事務職員に『キャンパル』の説明としようとしたら、『もう見えますからいいです』と、一言で拒否された。取材の時は教官が5人ほどずらっと並び、裁判所の法廷みたいな感じで答えてくれた。話しているのはほぼ1人だけ。他の教官が同席している意味が分からない。取材前に『これを読んでおいてください』と、専門家が読むような本を指定され、それについてしか答えようとしないうんざりがあった。取材後の記事の手直しに関しても、『応じないと掲載

を拒否する』と言われた。『筑波大学』という名前に誇りを持つのはいいが、こういう環境では私は勉強はしたくないと思った」

この学生の話聞く限り、筑波大学関係者の対応はいささか高圧的だったようだ。本人も「私が体験したのは、ごく一部の話だとは思いますが…」と述べているが、もともと筑波大に好意を持って取材に出かけただけに、筆者としてもこの対応はいささか心外だった。

弊社の人事部門担当者にも、筑波大学出身者についての評価を聞いてみた。すると、答えは「指示待ちタイプが多いのではないか」というものであった。このような評価を大学関係者はどう受け止められるだろうか？

「大学ランキング」2002年版によると、企業からの評価で「独創性がある」とする回答は、筑波大学は14位であり、他の有名大学と比べて遜色はない。学生記者や人事担当者の感想が例外的なものであれば、幸いである。

(しもかわ まさはる／メディア)